

創刊の辞

立教社会学会会長
立教大学社会学研究科委員長・立教大学社会学部長

砂川 浩慶

今号から従来の「社会学研究科年報」を改め、学会誌としての「立教社会学」としてリニューアルされ、刊行されることとなった。「社会学研究科年報」は1994年の創刊号から昨年度の第29号まで28年間の長きにわたって続いたものである。

前研究科委員長の水上徹男先生は、第23号(2016年)の編集後記で、創刊当時、社会学部助手だった経験を踏まえ、その意義を書かれている。(第2号を編集担当された池田央先生が)「大学院生の論文発表の場をつくりたいと話されていたのを覚えている。デジタル化やインターネット時代の幕開け目前の時期であったが、社会学の論文発表をする場が限定的な状況で、修士課程を含めた大学院生の論文が活字になる機会提供を意味していた」というものである。

「立教社会学」となっても、その基本的な意義は変わらない。大学院生の発表の場はネット上など格段に増えているが、このように冊子データとして、残していく意味は減じていない。「論文」「研究ノート」「書評」そして、その年に提出された博士と修士の「学位論文要旨」という構成は、基本的に今後も引き継いでいくものであろう。

今後は「社会学研究科年報」で培ったノウハウを「立教社会学」としてどのように発展させていくかが問われていく。教員のみならず、大学院生の皆さんの主体的取り組みに期待している。社会学が扱うテーマは、少子高齢化を迎えた日本社会が抱える様々な課題、そして社会のグローバル化によって、今後ますます拡がりを見せていくことは間違いない。社会学研究科のメンバーも留学生の増加によって、ますます多様化している。

過去を知り、現在を認識し、未来を語る。

「立教社会学」が、そのような場となることを願って、創刊の辞とする。